



避難者に声を掛けながら丁寧にパンを配る宮本晃輔さんは、コープあいちのデイサービスに勤務しています。

「平成28年(2016年)熊本地震」で甚大な被害を受けた熊本県では、全国の生協職員がさまざまな分野で支援活動を続けています。その中から、避難所での高齢者、障がい者の食事・入浴介助支援と、生協くまもとの店舗の一つ、コープ春日での健康チェック・健康相談会の取り組みをご紹介します。

### 介護分野での支援活動

### 高齢者や障がい者の 食事・入浴介助に 生協職員が奔走中

2016年5月20日時点で1,000人以上の避難者が過ごす益城町総合体育館（熊本県上益城郡）。その避難所で、大勢のスタッフに交じって活動する2人の生協職員の姿がありました。コープあいち デイサービス蒲郡 介護リーダー 宮本晃輔さんと福祉サービス本山 ケアマネジャー 尾崎正悟さんです。2人は配給のパンを、高齢の避難者に一つずつ手渡していきます。「お水は飲んでもますか?」「暑いから気を付けてくださいね」。そう声を掛けるたびに、相手から向けられる笑顔。そこから大きな勇気をもたせると2人は言います。

「常に明るく、積極的に接すること。相手の言葉にしっかりと耳を傾けること。私たちがができることは微々たるものですが、避難者の方は次第に笑顔を取り戻してくれるようになり、心のうちを口にしてくれるようになりました。そんな触れ合いを重ねていると、僕らがもって頑張つて支えたいという気持ちが大さくなります」

## 「平成28年(2016年)熊本地震」の被災地にて 生協の支援活動

生協くまもとほか



コープ春日での健康チェック、健康相談で和やかに組合員と話す医療生協の皆さん。



避難所でコーディネーターを務める広島県生協連専務スタッフの岡崎 晃さん。



避難者と話すコープあいちの尾崎正悟さん。「できるだけ楽しく会話をしよう心掛けています」。尾崎さんの名前を覚えて声を掛けてくれる方も多いそうです。

避難所の高齢者や障がい者に食事や入浴の手伝いや見守りを——。

こうした生協の支援活動が始まったのは、地震の発生から25日後の5月9日。全国の生協から職員が数人ずつ交代で派遣され、それぞれ4日間の活動を行なっています。

生協が被災地で介護分野の支援を行なうのは今回が初めて。甚大な被害のあった益城町や熊本県高齢者障害者福祉生活協同組合から支援要請を受けた熊本県生協連が、日本生協連へ支援を依頼したことから始まりました。

「生協は物資の提供やボランティアの派遣は行なってきましたが、介護支援は経験がないのでまだまだ手探りの状態です」

そう語るのは、現地で派遣先との調整などを務めるコーディネーターで、広島県生協連 専務スタッフ

フの岡崎 晃さん。

「避難者の栄養面や精神面にもできる限り配慮したサポートをしたいですね」

派遣された職員は皆、いわば介護のプロで、手助けが必要な方が簡易入浴場を利用する際の補助など、スキルを生かした対応により、現地でお役立ちしています。

他にも、益城町の介護福祉施設などに職員を派遣しています。

今必要なこと、今後求められるものなど、被災地の声に迅速に応え、全国各地から被災地へという、生協のネットワークを駆使した被災地支援が続いています。

### コープ春日での健康相談

## お店でできる健康相談で心のケアも

「生協が無料でこんなことをやっているなんてびっくりしました」

生協くまもとの店舗・コープ春日の店頭で、組合員からそんな言葉を聞きました。その男性が訪れていたのは、医療福祉生協連の呼び掛けで実施している「健康チェック・健康相談会」のブース。買い物ついでに立ち寄ってみたそうです。

医療福祉生協連では、今回の震災を受け、被災者の健康なくらし

を支えようと対策本部を立ち上げました。

熊本県には医療福祉生協がありませんが、生協くまもとの連携を模索し、話し合いを重ね、コープ春日の店頭で、「健康チェック・健康相談会」を行なうことを決めたのです。

九州・沖縄に加え、中国、四国の延べ15の医療福祉生協が参加。4月の終わりから、毎週金曜日に行なっています。医療福祉生協連会員支援部の大久保友登さん（おおくぼともたけ）にお話を伺いました。

「医師、看護師、歯科衛生士など専門職の職員が、血圧や貧血、筋力に血管年齢、体重・体脂肪の測定や、口腔、骨密度をチェックします」

これらの結果を基にコミュニケーションを取ることで、身体だけではなく心のケアもすることが目的です。

「決まった時間と場所で行なうことで、地域の方々にも認知されてきました。『ありがとう。安心してました』『全国から生協の仲間が来てくれてありがたい』と、うれしい言葉を掛けていただいています」



医療福祉生協連 会員支援部 大久保友登さん

しかし、「夜、ぐっすり眠れない」「余震が続くストレスがたまると」「食生活が乱れて体重が増えた」という訴えを聞くことも。

「この取り組みを継続的に行なっていくことが、今後さらに大事になります」と大久保さんは言います。

コープ春日 店長の磯本隆之（いそもとたかゆき）さんは「組合員さんから喜ばれている取り組みです。震災直後は店舗の営業再開に集中しましたが、次は被災した組合員さんを中心にバックアップしていくか。今後は店舗のセーリングでも案内して、この健康相談の取り組みを広くお知らせする予定です」と話します。

協同組合のつながりを生かした、息の長い活動が、地域の方々からも期待されています。

（文 丸山砂和 丸山泰武 /

写真 川上信也）